

※1 両側町

平安京の当初の計画では、正方形街区を一町とし、その東西にだけ家々が建ち並ぶ「二面町」が想定されていたが、道が平安京の生活空間の中心となっていたことを背景に東西南北に家々が建ち並ぶ「四面町」へと変化していった。このように道の重要性が定着するにつれ、正方形街区の道に面した四面それぞれが「丁」として独立している、「四丁町」が成立し、戦乱の時代になると、防衛のしやすさ等の理由から、道を挟んで向かい合う二つの「丁」が合同するという形で、新たな町が生まれていった。こうした町を「両側町」といい、街路を挟んで亀甲型をつくる。こうした行列が幾つか集まって親町を形成する。この町が、その後の京都の自治組織の基盤となっていき、今でも向い側同志で一つの町をつくることで密接に結びあっている。

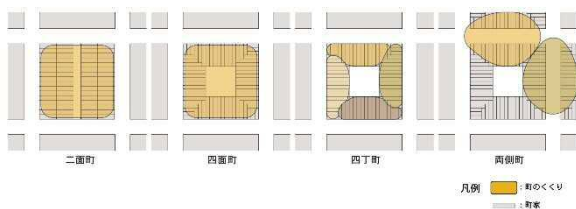


図1-8 両側町 概念変遷図

(4) 安土桃山時代

応仁の乱によって荒廃した京都の復興は、織田信長や豊臣秀吉によって進められた。入洛した信長は、永禄2年(1569)に上京と下京を結ぶ室町通に面して、石垣や天守を備えた城郭(旧二条城)を築造し、洛中の軍事支配を強化するとともに、上京と下京の一元化を図った。信長の政策を引き継いだ秀吉は、平安京以来の一大土木工事を行った。

その一つが京都の城下町化である。天正15年(1587)に大内裏の跡地に本格的な城郭である聚楽第^{じゅらくだい}を建設するとともに、天正19年には、外的防御と洪水対策のために洛中と洛外を区別する土塁^{おどい}(御土居)の築造に着手した。

二つ目は、市街地の新しい地割である。天正18年、秀吉は、正方形街区の中央に南北の小路を通し、二つの短冊状の町割りに分割した。これが、現在まで伝わる短冊状の町割りである。これにより正方形街区の中央に残されていた空地が開発され、効率的に土地が利用されるようになった。また、点在していた寺院を現在の寺町と寺之内に集めた。

天正18～19年における京都改造事業のしめくく

りというべき御土居築造が完了した結果、洛中と洛外は明確に区分されるに至る。

こうした都市改造によって、京都の町は近世の城下町へと変化し、今日の市街地にも引き継がれている。

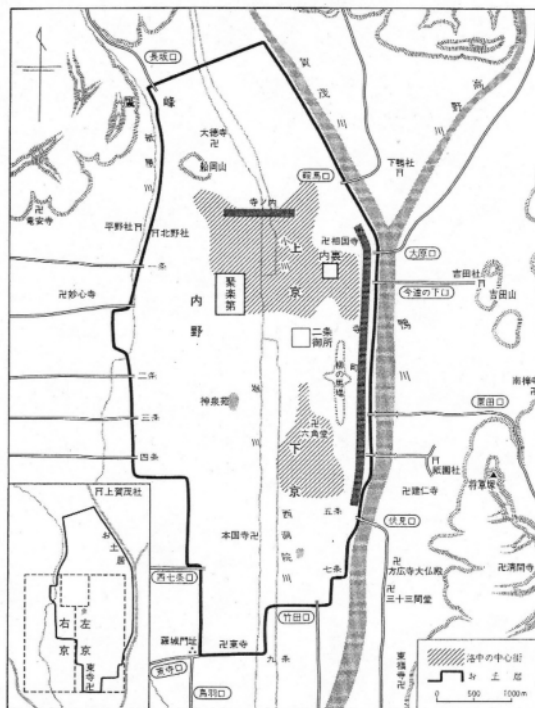


図1-9 “御土居”に囲まれた京都の町 出典「京都の歴史4」

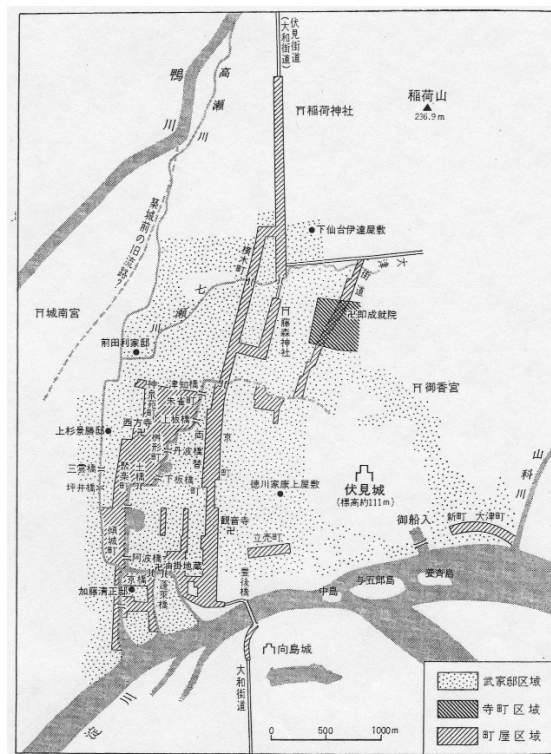


図1-10 伏見城下町復元図 出典「京都の歴史4」

※御香宮は旧位置